

マーガレット・ガティの『自然界のたとえ話集』 (*Parables from Nature*, 1855-71)における科学的態度 ——ヴィクトリア朝中期のナチュラル・ヒストリーの一側面——

松 田 美作子

はじめに

19世紀半ばの英国では、工学や技術の著しい発展がもたらした産業革命による社会の変化に伴い、とくに神学および科学も激しい変動期を経るようになる。信仰の面では1833年から約10年間、福音主義の優位に対する反動として、17世紀の高教会派の復興であったオクスフォード運動のような英国国教会内部での教会改革・信仰復興の機運が生じた¹⁾。科学の分野では、それまでのアマチュアの自然愛好家の博物学的な活動から専門分野に分化して、近代科学の発展をみる。なかでも、ダーウィンの『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*, 1859)における生物進化論²⁾から展開される自然淘汰による適者生存の原理は、社会的、技術的に大きな論争を巻き起こしたが、最も大きな批判は宗教界から起こった。人間が下等生物から進化したとすれば、それは人間の尊厳の否定となり、偶然の変異と自然淘汰というダーウィンの進化のプロセスは、神の万物創造と摂理計画とは相いれないものであった。本論で取り上げるマーガレット・ガティ (Margaret Gatty, Mrs. Alfred Gatty, 1809-73) は、ダーウィンと同年に生まれ、当時、植物か動物か不明であったイソギンチャク、珊瑚、海綿などの植虫類 (zoophytes) やフジツボ (甲殻類) に関心を寄せ、自ら収集し、研究していた³⁾。生物に対する旺盛な探求心において共通していた二人は、宗教と科学が分化していく変転期に執筆活動を行った。ガティは、アマチュアの自然愛好家としては植虫類のほかに藻類を収集して観察、分類を行い、その

13年間に及んだ成果を大著、『英国の藻類』(*British Sea-weeds*, 1863)にまとめあげた科学的探究心をもった女性である。同時に彼女は多くの若年層向け読み物を著し、彼らのための雑誌、『ジュディおばさんの雑誌』(*Aunt Judy's Magazine*, 1866-73)を編集かつ執筆をした作家でもあった。さらに終生その活動の根底にあったエンブレムへの関心は、晩年『エンブレム集』(*A Book of Emblems*, 1872)に結実した。この時代の英国では、16、17世紀に流行したエンブレムの復興が起きる。その復興運動は、フランシス・クォールズの宗教的エンブレムを中心とした宗教的要因によるものとして議論されてきた⁴⁾。しかし、当時の宗教に科学が与えた影響との関連についての議論はなされてこなかった。この点を解明するために、まず女性ナチュラリストでエンブレム作者かつ作家であったマーガレット・ガティに着目し考察したい。彼女の生活の中心は、牧師の妻として教区の、とくに子供たちへの奉仕であった。信仰心篤く、10人(そのうち2人は夭折)の子供のよき母であったが、たぐいまれなほど多才であった彼女の作品から人気のあった『自然界のたとえ話集』を取り上げ、当時の文学にも多大な影響を与えたダーウィンの学説との関係からガティの科学的態度を明らかにしたい。

マーガレット・ガティの生涯

最初にマーガレット・ガティの生涯を概観したい。彼女の生涯については、作家である娘、ジュリアナ・ホラティア・ユーイング(*Juliana Horatia Ewing*)が『自然界のたとえ話集』を母の死後1882年に新たに編集して出版した折、詳しい思い出を付し詳述している⁵⁾。1809年、アレクサンダー・ジョン・スコットの娘としてバーナム・オン・クラウチ(*Burnham on Crouch*)に生まれたマーガレットは、2歳の時、母メアリー・フランシスを亡くし、以後父の薫陶を受けて育つ。アレクサンダーは、海軍付き牧師で、1793年から1805年までネルソン提督の船、*Victory*号の牧師も務めたが、ネルソン提督の言葉を借りれば、“foreign Secretary”(外務大臣)のような存在で、諸国の外相たちに信頼も厚く、トラファルガーの海戦での提督の死までよく仕えた(“Introduction” by *Sheffield in Gatty*, xii)。寄港地で熱心に書物を買ひあさり、船上に立派な書庫を築き、提督の死後はヨークシャーの牧師館で静かな生活を送っ

た。妻を亡くしてから72歳で亡くなるまで、古書を紐解き、あらゆる言語を習得しようと学問に情熱を注いだ。マーガレットと姉のホラティアは、様々な分野の学問、たとえば地理やヘブライ語にも接する機会があった。マーガレットは、そのなかでも描画、エッチング制作や文学に興味をもった。父の書斎にはエンブレムブックも数多くあった。ヤコブ・カッツ (Jacob Cats, 1577-1660) のエンブレムブックを読むためにオランダ語を学んだ父のように、彼女もカッツのエンブレムを学び、のちの『ジュディおばさんの雑誌』に掲載する彼女自身のエンブレムに借用している。そのほか、ルネサンス期のアルチャート、サーベドラ、わけでもフランシス・クォールズの『エンブレム集』(1635) が彼女に与えた影響は大きかった (Katz, 14)。彼女のエンブレムについては、また論を別にして述べたい。

父の驚くべき豊かな蔵書とともに自宅で教育を受けたマーガレットは、1839年、ヨーク大聖堂の副主席司祭も努め、多くの著作のある牧師のアルフレッド・ガティ (1813-1902) と結婚し、シェフィールド近くのエクルフールドのセント・メアリー教会の牧師館に居を移し、その地で終生暮らす。1848年から49年、体調を崩した彼女は、ヘイスティングスで療養中に、当時都会の喧騒を逃れて海辺に来る人々に人気のあった海藻の収集を始める。そして、*Phycologia Britannica, or A History of British Seaweeds*, 4 vols (『英国の藻類』、1846-51) や *Nereis Boreali Americana* (『アメリカの海産藻類』、1852-58) などの著作のあるハーヴェイ博士 (William Henry Harvey, 1811-66) とは10年にわたって文通を重ね、交流を深めた。この時代は、アマチュアの人ナチュラリストの全盛期で、さまざまな生物の収集を行い、それらが科学的で専門的なコレクションとして認められることもあった。とくに浅瀬や潮だまりでの海藻や磯の生物の観察や収集は、男女の別なく大変な人気を集めていた。トテナムのナースリーマンかつジャーナリストであったジェームズ・シャーリー・ヒバード (James Shirley Hibberd, 1825-90) は、海藻収集のガイドブックを著したが、彼の言葉によれば、海藻は何より「被造物の中でも神の意志の完璧な表現」(“complete expression of the Will of God in things created”) で、価値のあるものであった (Hibberd, p. 1)⁶⁾。あまたの人ナチュラリストたちが海藻に関する著作を著した。当時、社会での活動が制限されていた女性にとって、とくに知的好奇心を持った育

ちの良い女性にとっては、植物や海洋生物を通じて科学に触れることのできるナチュラリストとしての活動は、魅力的であった⁷⁾。有名になる前のベアトリス・ボターは菌類、エミリー・ディキンソンはハーバリウムを研究した。マーガレットは、藻類と植虫類 (zoophytes) を収集したが、とりわけ苔虫類 (polyzoa) に熱中した (“Introduction” by Sheffield in Gatty, xix)。それは13年間にわたって続けられ、ハーヴェイ博士の監修のもと、1863年、『英国の藻類』に結実する。自ら80枚の精緻なカラーイラストを描き、観察と分類を重ね、高名な学者と熱心に文通して助言を仰ぎ、新種を発見したこの著作の評価は今日でも高い⁸⁾。こうした自然との科学的といえる向き合い方は、彼女の文筆活動にも反映されていると思われるが、当時論争を巻き起こしたダーウィンの『種の起源』に代表される進化論に、彼女はどのように向き合ったのだろうか。彼女は、家族や周囲の人々に、ダーウィンの学説に対する反対意見を述べていたという⁹⁾。その批判は公に発表されていないが、当時の信仰と科学の相克の問題は、彼女にとっても無縁ではなかったであろう。

晩年、マーガレットは、10年以上リウマチや神経痛に苦しみ、右手の自由を失ったが、左手で書く努力をし、それも動かなくなったら、口述筆記を娘に頼んで、終生著作を発表し続けた活力あふれる女性であった。その作品は、子供に向けて書かれた物語がほとんどで、ユーイングによれば、「小さきものに子供がみる純粋な喜び」 (“A child's pure delights in little things”, “Introduction” by Sheffield in Gatty, xxvii) に寄り添い、少年少女にたとえ話で表現された教えを説くものであった。自然界の動植物にも人間の生活にも同等に洞察と共感をもって、陳腐ではない、子供にとっても大人にとっても公平な道徳を伝えるものであった。初の著作は、『妖精の名付け親やほかのお話』 (*The Fairly Godmothers and Other Tales*, 1851) であり、その4年後に自ら挿絵を描いた『自然界のたとえ話集』の第一巻が出版された。このシリーズは、1871年に第五巻が出版され、現在、彼女の著作の中でもっともよく知られたシリーズであろう。彼女の死後もユーイングが引き継いだ。この第一巻は、クロロホルムを治療に導入したジョンストン博士 (George Johnston, 1797-1855) に捧げられた¹⁰⁾。彼女は出産の痛みを和らげるためにクロロホルムを使用したシェフィールド初の女性であった。クロロ

ホルムのような新しい薬品の使用に反対する非科学的な人々は、神のプロヴィデンス（すべては神の配慮によって起こっている）を妨害するとしたが、ガティは出産時の痛みを和らげるのは、神の“tender loving kindness”（「愛に満ちた手厚い世話」）として受け入れたのであった（“Introduction” by Sheffield in Gatty, xviii）。ここにも彼女の信心が科学の進歩について偏見にとらわれないものであったことが看取できよう。ガティのもうひとつの大きな関心事は、エンブレムと日時計であった。この二つも 1872 年、彼女の最後の著作として出版された『日時計の本』（*A Book of Sun-dials*）と『エンブレム集』（*A Book of Emblems*）に結実した。本論ではこの二つは扱わない。アマチュアながら科学的な観察と分析によって藻類や珊瑚やイソギンチャクなどを研究したガティのたとえ話は、自然界の動植物をどのように扱って、道徳的教えを表現しているのか、それは当時のダーウィンの生命の起源論とどのように異なるのかを、具体的に『自然界のたとえ話集』から作品を取り上げて考察したい。

『自然界のたとえ話集』（*Parables from Nature*） における宗教と科学的態度

『自然界のたとえ話集』は、題名通り子供たちに身近な動植物や自然現象を用いて、「希望」、「従順」、「自制」などを寓意的に説いたガティの代表的著作のひとつである。その第一巻と第二巻にはガティ自身が、以後は娘たちが描いた挿絵のほかに、各話の始めに短い文章が付されている。これは話の内容を象徴するような文章で、エンブレムのモットー部分に相応する。対となる頁に描かれた挿絵は、エンブレムの図版に、そして本文はエンブレムの詩文部分にあたる。さらに各話には自然誌についての注釈（notes on the natural history）が付されている。この注解は、近代初期のエンブレムで、欄外注が付されていることと類似している。このシリーズは、エンブレム的な構成をもっているといえるだろう。Parables というタイトルもまた、エンブレムと親和性をもつ。彼女はフランシス・クォールズをはじめとする英国のエンブレム作家はもちろん、ヤコブ・カツツといった近代初期の「大陸」のエンブレム作家もよく知っており、自身の著作に使用している。各話に登場する動植物や昆虫などについて、詳細な解説がなされており、この注解には彼女の自

然界の生物に対する深い理解がみてとれる。たとえ話を読んで、単に教訓を受け取るのではなく、科学的な説明から話の中で取り上げられた動植物への理解も深めてほしいという彼女の希望が込められている。たとえば、第一巻の第一話、“A Lesson of Faith”（「信仰の教え」）では蝶が卵から青虫、蛹を経て蝶へと変身するプロセスを用い、雲雀が、蝶になれるか未来を案ずる青虫に“Faith”を説く。初めのモットーにあたる文章、“If a man die, shall he live again? All the days of my appointed time will I wait, till my change come.”は、ヨブ記14章14節からの引用で、「人は死んでしまえばもう生きなくてもよいのです。苦役のような私の人生ですから交代の時が来るのをわたしは待ち望んでいます。」と、現世での苦難の終わりが強調される。図版にあたる挿絵は、臨終を迎えたベッドに横たわる女性と、天に旅立つ彼女の霊の姿が描かれている（図1）。人は死後、生まれ変わる、死を迎えても信仰をもてば、第二の生、すなわち天の国での永久の生が得られることを教える。このたとえ話の注解では、まずこの蝶はモンシロチョウ（Cabbage Butterfly）であり、よく見られるこの蝶の学名（*Pieris rapae*）、餌、羽根の模様など生態の説明があり、次に青虫の説明があり、青虫にはラテン語の学術名、Larvaを記し、他の色をした幼虫について、餌により赤色などもあ



図1 “A Lesson of Faith” from *Parables from Nature with a Memoir of the Author* by J. H. Ewing, p. 1

ることを説明している。さらに蝶の羽についての詳細な解説、雲雀についての説明、最後にこの話の教えは、トマス・ブラウンの *Religio Medici* (『医者宗教』、1643) から採ったことを解説する。本文6頁に対して注解は5頁に及び、宗教的な教えを説く本文と同時に充分すぎるほどの科学的な知識を付し、宗教的テーマと科学的知識の双方が述べられ、これらの共存に彼女の作品の特質がみられる。このたとえ話に登場する雲雀と青虫は捕食者と被食者の関係にある。捕食者が被食者に信仰が死後の平安を約束することを説いている。She であらわされる青虫のほかにも青虫は葉っぱにたくさんいる。しかし、雲雀の言葉に耳を傾けたこの青虫は、その他の青虫と区別されている。弱い立場の被食者が、疑いを持たずに信じることは救いとなるという従順な信心の重要性は、ガティの信仰に対する態度をよくあらわしている。

『自然界のたとえ話集』は、1855年に第一巻が刊行されたので、ダーウィンの『種の起源』より四年早い。ガティは1860年には以下のような手紙を『ジュディおばさんの雑誌』の版元であるジョージ・ベルに送り、ダーウィンに対する批判を述べている。

Darwin's collection of facts and his candour and simplicity are all admirable. But I think his mind is in a wrong direction. He has endeavoured by 'searching to find out God' & the attempt apart from his fact learning is downright ridiculous. I doubt very much that the work will have a permanent effect of any kind, for I think it will be found out by somebody and exposed as a great man's blunder. With Dr.Hooker, Sir Charles Lyell, Professor Huxley &c against one, this is much to say - but I cannot take any other view. (Letter to Bell, 14, March, 1860, *Bell Archives*, 310/1)

ダーウィン氏の事実の収集や彼の公平さと誠実さはすべて賞賛に値する。しかし、彼の考えは誤った方向へ導かれている。彼は「神を見出すために探求すること」に拠って努力してきたが、事実の学びを除いた試みはまったくばかげている。この著作が永続的な影響を持つかについてはとても疑わしい。というのも、それは誰かによって見破られ、偉人の過ちとして顕わになると思う。フッカー博士、

チャールズ・ライル卿、ハックスレー教授やほかの人々が一人に反対しているという状況では、言いたいことがたくさんある——しかし、わたしはほかのどんな見解もとることはできない。(筆者訳)

ダーウィンは『種の起源』の草稿を1842年頃に準備しており、ラマルクはじめ、自分より先駆的な研究の存在にも目配りしていた。そして発表までに上記文中の植物学者で1844年に草稿を読んでいたフッカー博士、リンネ学会に「抜粋」たるこの書を送るよう託したライル卿、友人ハックスレーといった人々に序文で言及し、宗教界からの非難を充分予想して、準備に時間をかけて1859年に初版を刊行した。その謙虚な性格や、飼育、栽培されている動植物に対して行った膨大な観察から得た事実は、ガティも認めている。しかし、「種は変化する」、「すべての生物には共通の先祖がいる」といったダーウィンの考えは、種は変化しない、神が個々の生物をその姿で創造したとする創造説とは相いれない。マーガレットの夫、アルフレッドは、1836年オクスフォード大学を出ているが、オクスフォード運動との関係はなく、穏健な高教会派の国教会の聖職者であった。マーガレットとともに、彼女の父の思い出の記、*Recollections of the Life of the Rev. A. J. Scott, DD, Lord Nelson's Chaplain* (1842) はじめ、いくつかの著書も著しており、マーガレットのナチュラリストとしての活動や著作の執筆に深い理解を示し、応援していた。アルフレッドは牧会者として教区コミュニティの面倒をみ、伝統を重んじた教理に忠実で道徳主義的なヴィクトリア朝の英国国教会聖職者の典型であった (*Dictionary of National Biography*, 760)。そうした環境で彼女もまた、伝統的な創造説を信奉していたと考えてもよいだろう。生物を個々に神が創造したとする伝統的な創造説を否定するダーウィンの学説は、ガティには受け入れ難いものであったと推察される。この点を考えるにあたって、『自然界のたとえ話集』からもう一話、“Inferior Animals” (「下等な動物」) を取り上げて考えてみたい。

「下等な動物」は、“What do they say?” (「彼らは何と言っているのか?」) と話し手が語りかけるところから始まる。“They” が何を指すのかわからないまま、話し手つまり作者であるガティは話を進める。エンブレムのモットーにあたる文章は、ゲーテが晩年まとめた『全集最終版』(1827) などに含まれる一連の詩群、“Gott, Gemüt und Welt”

(1815-27) の冒頭の二行に拠る¹¹⁾。“How? when? And whence? And gods give an reply./ Let so it suffice, and cease to question why.” (「どのようにして? いつ? そしてなぜ? そこで神々は答え給う。/それで充分だとし、なぜかを問い続けるのはやめよ。』)。ガティは若いころからドイツ文学に親しんでいて、ゲーテのこの詩の英訳も、彼女によるものである。そして挿絵は文中に出てくる森の野辺の榆の木を描いていると思われる (図2)。このあたりである集会が開かれるのである。彼らが言っていることが話し手にはわからない、われわれ人間が母猫が子猫に何を言っているのか、母犬が子犬に何を言っているのかかわからないように。しかし子供だけがもっている学問に歪められていない疑うことを知らない方法で、その集会がある場所へ行ってみようと読者を誘う、この世界の隠れた秘密を理解するために。主な読者である子供の純粋で無垢な精神に訴えかけるのである。

Hand in hand, in the dear confiding way which only children use,
let us go forth into the fields, and read the hidden secrets of the
world. Clasp mine firmly as I clasp yours. See, there is magic in the
action itself! (*Parables from Nature with a memoir of the Author*, p. 216)

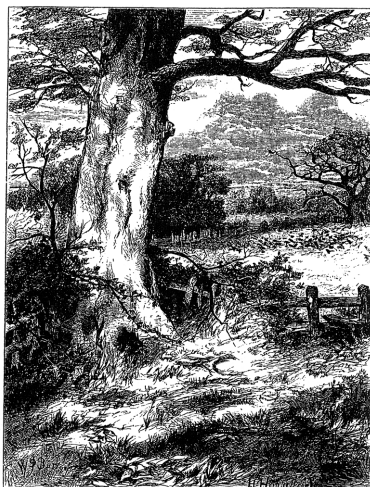


図2 “Inferior Animals” from *Parables from Nature with a memoir of the Author* by J. H. Ewing, p. 212

手をつなぎ、子供たちだけがやる親しげな仕方で、野に入っていきます。そしてこの世界の秘密を読み解きましょう。私があなただけの手をしっかりと握りしめているように、私の手をぎゅっと握って。見てて、行動するからこそ不思議なことが起きるの。

このあとすぐ、そこに集まっているのは群生するミヤマガラス (rook) であることが知らされる。せわしなく飛び跳ね、カアカア言っているミヤマガラスたちは、何のために集まっているのか、話し手はいぶかる。

Hush! Is it a parliament, or a congregation, or what, that darkens over yonder field? Are rook-politics, or rook-faith, or rook domestic hopes and fears, the subjects of that everlasting cawing, those restless movements, those hoppings and peckings, and changes of position? (*Parables from Nature with a memoir of the Author*, p. 216)

静かに！ それは討議会なのか、会衆なのか、おや、向こうの野原を暗くしているあれは何？ ミヤマガラスの政治、それともミヤマガラスの信仰、それともミヤマガラスの希望や恐れなのか。あの絶え間ないカアカア言う鳴き声、落ち着かない動き、ぴょんぴょん飛び跳ね、くちばしで突きまわり、動き回っている的は何？

人間は神のように善と悪を知っているといっても、ミヤマガラスたちが言っていることはわからない。しかし突然、夢の中にいるかのように話し手の耳にミヤマガラスの言葉が人間の言葉として聞こえてくる。ミヤマガラスたちがこの集会で議論しているのは人間の起源である。“The origin, therefore, of these creatures, these men, whom we equally fear and dislike, is decidedly the most useful of all subjects of study” (「したがって、これらの生き物、われわれが恐れ嫌うこれら人間の起源は、研究の全主題の中で、議論の余地なくもっとも有益なのだ」、p. 219)。そしてカラスたちはなぜ人間がわれわれより優れていると言えるのか、あるいは言えないのかについて議論する。“Is man superior to ourselves after all? No one can show me the fact by proofs.” (「結局のところ人間はわれわれより優等なのか？ 誰もわたしに証拠によって裏付けされた

真実を示せない」、p. 221)。彼らは、どのように、いつ、どこから、そしてなぜ（“How, when, whence, and why”）人間はわれわれより優れているのかを長々と議論するが、その中で繰り返し言われるのは、事実による裏付けによって説明されないといけないということである。これは、ミヤマガラスたちのやり取りが科学的な態度で行われていることを強調していると考えられる。そして彼らの集会が、ダーウィンの学説に関することを示唆するのである。

議論中に、あるミヤマガラスが人間は大昔カラスだったと述べる。われわれの森に侵入し、樹に昇り、煙を使ってひなを連れ去る。恐れのもとである人間は、われわれより優位な存在である。そうした考えに対して別のミヤマガラスは、“spirit of inquiry”（「探求の精神」）によって、人間が自分たちより優位であるということを信じておらず、それは“the delusion of timid mind”（「臆病な心が抱く妄想」、p. 221）にすぎないと反論する。そして、人間の発達の優位性を否定する証拠として、飛べないこと、服が必要なこと（“Behold him—a featherless, thin-skinned biped.”）、さらにひなを巣から連れ去る残酷さや怠惰ゆえに、人間はわれわれとは別の生物となっているという。ガティは“But what cannot we flatter ourselves we have proved, when our minds are warped by a theory!”（p. 223）（「しかし、われわれの心がある学説にゆがめられているとき、われわれは証明したとうぬぼれるわけにはいかない。」）と言って、どちら側の主張にもくみしない。この「ある学説」とは、まさにダーウィンの進化論を意識したものであろう。結局どちらの論証も説明が充分とは言えないまま続き、いつの間にか鳥たちは離散、いつの間にか姿も声も消え去り、ガティはこの話を以下の文で締めくくる。

Woe upon us! The world grows old, and life is repeated from age to age, and the same sins are sinned. Still we desire to be as God in knowledge; still the hand writes in fire upon our walls, “Except ye become as little children, ye shall not enter into the kingdom of Heaven.”（p. 234）

われわれに災いあれ！ 世界は老い、人の世は時代から時代へと繰り返され、同じ罪が犯される。それでもわれわれは知識において神

のようになることを欲す。今でも手は壁に炎の中で書く。「幼子のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」

最後にガティは、聖句「幼子のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」マタイによる福音書 18 章 3 節を引用している。人間は今も神のごとき知識を求め、手は炎の中で壁に書く。この “the hand writes in fire upon our walls” とは、ダニエル書第 5 章 5 節にあるバビロニアのベルシャツアル王の酒宴にて突然人の手の指が現れ、宮殿の壁に王の治世が終わるといふ神の警告が告げられたことを指す。その夜に驕慢な王が殺され、バビロン王国は滅亡する。この戒めのように、信仰とは無垢な幼子のように神に対して従順でなければならず、起源について科学的態度をミヤマガラスたちに取らせながら、ガティは読者に信心の重要性を説く。子供向け読み物を多く著し、子供たちやその両親に信仰が深まるよう導くことに生涯専心していたガティの意図がよく反映されている。そして、同一の先祖から進化したという学説に対して、声高に非難するのではなく慎重に対応している。

結び

本論では、マーガレット・ガティの『自然界のたとえ話集』から 2 編のたとえ話をを用いて、ダーウィンの学説に疑問を呈しながらも、科学と宗教の双方に関心をもち、身近な動植物を用いたたとえ話によって、子供たちに信仰とともに科学的な探求を奨励するガティの特質をみてきた。事実を集めて仮説を立て、論証する科学的な態度と、神に対して疑いをもつことのない従順な信仰の両方を、子供たちにもわかりやすく伝えようとした彼女の著作は、ヴィクトリア朝時代の宗教と科学の関係性を考えるうえで一考に値する。ここで扱うことができなかった雑誌や『エンブレム集』についても考察を進め、論を改めてエンブレム復興運動における彼女の科学的態度をさらに解明したい。

* 本稿は、成城大学特別研究助成「19 世紀イギリスにおける宗教刷新運動とエンブレム復興における科学的態度」に基づく研究成果の一部である。

注

- 1) ノーマン・サイクス著、野谷啓二訳『イングランド文化と宗教伝統—近代文化形成の原動力となったキリスト教』（開文社出版、2000）、第20章（168-173頁）を参照。
- 2) ダーウィンは、「進化」（evolution）という語を、『種の起源』第5版（1869）まで用いていない。ハーバート・スペンサーの『第一原理』（*First Principles*, 1862）で、宇宙、生物、社会すべてが進歩するとした進化哲学の浸透に影響され、第6版（1872）にて新たに書き足した部分でこの語を用いたといわれている。松永俊男『ダーウィンの時代—科学と宗教』（名古屋大学出版会、1996）、335頁。
- 3) 本論では言及しないが、ダーウィンは、1846年から現生および化石のフジツボ類を徹底的に調査し、詳細な挿絵入り著作、*A Monograph on the Sub-class Cirripedia: with Figures of All the Species* (London: Ray Society, 1851) を発表し、フジツボが貝ではなく、甲殻類であることなどを立証した。詳細は以下を参照。Rebecca Scott, "Darwin's Banacles: Mid-century Victorian Natural History and Marine Grotesque" in *Transaction and Encounters*, eds by Luckhurst and McDonagh, pp. 151-81.
- 4) ヴィクトリア朝のエンブレムに関しては、Karl J. Hörtgen, *Aspects of the Emblem* (Kassel: Edition Reichenberger, 1986) 第IV章、「ヴィクトリア朝におけるエンブレム再興」を参照。（邦訳は川井万里子・松田美作子訳『英国におけるエンブレムの伝統』〔慶應義塾大学出版会、2005〕）
- 5) ここでは娘、ユーイングの記述した思い出の記からガティの生涯について紹介しているが、以下の拙論も参照されたい。松田美作子「Margaret Gatty, *Parables from Nature* とヴィクトリア朝期エンブレムの復興—“A Lesson of Faith”を中心に」『成城イングリッシュモノグラフ』40号（2008）、407-23頁。とくにハーヴェイ博士ら、男性植物学者との交流について詳述している。
- 6) ハントは、ヒバードに類した書籍の長いリストを掲載している。Stephen E. Hunt, "Free, Bold, Joyous: The Love of Seaweed in Margaret Gatty and Other Mid-Victorian Writers", *Environment and History*, vol. 11, no. 1 (2005), pp. 27-8.
- 7) たとえば、旅行作家でもあり、植物の顕微鏡観察で有名なルイザ・レーン・クラーク (Louisa Lane Clarke, 1812-83) は、小さな貝殻にみられる傷跡もミニチュアのロゼッタ・ストーンの暗号のようだと述べた。磯の生物探求は、女性ナチュラリストにとって、精神を開放し、主体的に活動できる得難い場であった。(Louisa Lane Clarke, p. 184) ヴィクトリア朝中期のナチュラル・ヒストリーにおいて、海辺の生物、とくに海藻への関心と関連著作が、科学と人文科学とのインターフェースであったかは、以下に詳

- しい。Lynn L. Merrill, *The Romance of Victorian Natural History* (New York: Oxford University Press, 1989)
- 8) Suzanne Le-May Sheffield, *Revealing New Worlds: Three Victorian Women Naturalists* (Routledge, 2001) の Section I (第一章と第二章, 13 頁から 74 頁) は、マーガレット・ガティのナチュラリスト活動の解説にあてられている。
- 9) Wendy R. Katz, *The Emblems of Margaret Gatty: A Study of Allegory in Nineteenth-Century Children's Literature* (New York: AMS Press, 1993), pp. 47-8 を参照。
- 10) スコットランド人のジョンストン博士もまた、マーガレットのナチュラリストの友人の一人であった。彼は、*History of British Zoophytes* (1838), *A History of British Sponges and Lithophytes* (1842) などの著者であった。
- 11) "Gott, Gemüt und Welt", *The Complete Works of J. W. von Goethe in ten volumes* (New York: P.F.Collier & Sons, 1839), vol. 9.
[http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe,+Johann+Wolfgang/Gedichte/Gedichte+\(Ausgabe+letzter+Hand,+1827\)/Gott,+Gem%C3%BC](http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe,+Johann+Wolfgang/Gedichte/Gedichte+(Ausgabe+letzter+Hand,+1827)/Gott,+Gem%C3%BC)

引用文献

- Clarke, Louisa Lane, *The Microscope: Being a Popular Description of the most Instructive and Beautiful Subjects for Exhibition* (London: G. Routledge and Co., 1858)
- Compact Edition of the Dictionary of National Biography: Complete Text Reproduced Micrographically*, vol. 1 (Oxford: Oxford University Press, 1975)
- Gatty, Margaret, *Parables from Nature, with a Memoir of the Author by J. H. Ewing, with an Introduction by Suzanne Le-May Sheffield* (Bristol: Thoemmes Press & Tokyo: Edition Synapse, 2003)
- Goethe, Johann Wolfgang, "Gott, Gemüt und Welt" in *The Complete Works of Johann Wolfgang Goethe in ten volumes* (New York: P.F.Collier & Sons, 1839), vol. 9
[http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe,+Johann+Wolfgang/Gedichte/Gedichte+\(Ausgabe+letzter+Hand,+1827\)/Gott,+Gem%C3%BC](http://www.zeno.org/Literatur/M/Goethe,+Johann+Wolfgang/Gedichte/Gedichte+(Ausgabe+letzter+Hand,+1827)/Gott,+Gem%C3%BC)
- Hibberd, James Shirley, *The Seaweed Collector: A Handy Guide to the Marine Botanist Suggesting What to Look for, and Where to go, in the Study of the British Algae, and the British Sponges* (London: Groombridge and Sons, 1872)
- Höltgen, Karl Josef, *Aspects of the Emblem: Studies in the English Emblem Tradition and the European Context* (Kassel: Edition Reichenberger, 1986) 邦訳: カール・ジョゼフ・ヘルトゲン著、川井万里子・松田美作子訳『英国におけるエンブレムの伝統—ルネサンス視覚文化の一面』(慶應義塾大学出版会、

2005)

Hunt, Stehen E., “‘Free, Bold, Joyous’: The Love of Seaweed in Margaret Gatty and Other Mid-Victorian Writers”, *Environment and History* vol. 11 (2005), pp. 5–34.

Katz, Wendy R., *The Emblems of Margaret Gatty: A Study of Allegory in Nineteenth-century Children's Literature* (New York: AMS Press, 1993)

Merrill, Lynn L., *The Romance of Victorian Natural History* (New York: Oxford University Press, 1989)

松田美作子「Margaret Gatty, *Parables from Nature* とヴィクトリア朝期エンブレムの復興—“A Lesson of Faith”を中心に」、『成城イングリッシュ・モノグラフ』no. 40 (2008), pp. 407–23.

松永俊男『ダーウィンの時代—科学と宗教』（名古屋大学出版局、1996）

Scott, Rebecca, “Darwin's Banacles: Mid-century Victorian Natural History and the Marine Grotesque”, in Roger Luckhurst and Josephine McDonagh (eds), *Transactions and Encounters: Science and Culture in the Nineteenth Century* (Manchester and New York: Manchester University Press, 2002), pp. 151–81.

Sheffield, Suzanne Le-May, *Revealing New Worlds: Three Victorian Women Naturalists* (London: Routledge, 2001)